



AWS
White Belt
Online Seminar

【AWS **White Belt** Online Seminar】

クラウドジャーニー

アマゾン ウェブ サービス ジャパン株式会社
アソシエイト ソリューションアーキテクト 上原 友理

2018.04.17

自己紹介

上原 友理

技術統括本部

アソシエイト ソリューションアーキテクト

前職は外資ベンダで、移行案件を担当していました。
面倒くさがりなので、どんどん自動化したいです。

好きなサービス

- RDS : マネージド DBサービス
- S3 : マネージド ストレージサービス



内容についての注意点

- 本資料では2018年4月17日時点のサービス内容および価格についてご説明しています。最新の情報はAWS公式ウェブサイト(<http://aws.amazon.com>)にてご確認ください。
- 資料作成には十分注意しておりますが、資料内の価格とAWS公式ウェブサイト記載の価格に相違があった場合、AWS公式ウェブサイトの価格を優先とさせていただきます。
- 価格は税抜表記となっております。日本居住者のお客様が東京リージョンを使用する場合、別途消費税をご請求させていただきます。
- AWS does not offer binding price quotes. AWS pricing is publicly available and is subject to change in accordance with the AWS Customer Agreement available at <http://aws.amazon.com/agreement/>. Any pricing information included in this document is provided only as an estimate of usage charges for AWS services based on certain information that you have provided. Monthly charges will be based on your actual use of AWS services, and may vary from the estimates provided.

本日のテーマ・・・クラウド ジャーニー

“クラウド ジャーニー” ってなんだ？

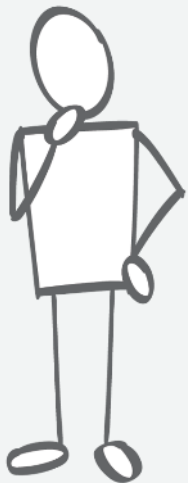
Cloud Journey = クラウドへの旅路

クラウドを活用して
ビジネスを成功させる道のり



本セミナーの目的

よく知らない場所へ旅に出る時に必要なのは・・・？



先導する人＝リーダーが必要

このセミナーをご覧のみなさまに、
「クラウドのビジネス活用リーダー」に
なって頂くことが目的です

本セミナーの対象

- 様々なシステムを使う/作る現場で**クラウドを導入したいと感じている方**を対象とします
- **どのようにクラウド移行すれば良いのか分からない**というお悩みにお答えします
- **トップダウンで推進されることの多いクラウド移行を、現場から推進する為にするべきこと**をご案内します

※「クラウドジャーニー」は新規/既存を問わずクラウドを導入・活用していく道のりを指しますが、本セミナーでは既存システム移行をメインにご説明します。

リーダーがすべき準備

1. ゴールを明確にする
 - ビジネス戦略を意識し目的を明確化する
2. ルートを決める
 - クラウドジャーニーの2つの道から、組織やシステムに合った行程を選択する
3. 仲間を集める
 - 必要な情報を提供してステークホルダーの協力を仰ぐ
4. 道具を準備する
 - 必要な移行ツールを知って使用する

リーダーがすべき準備

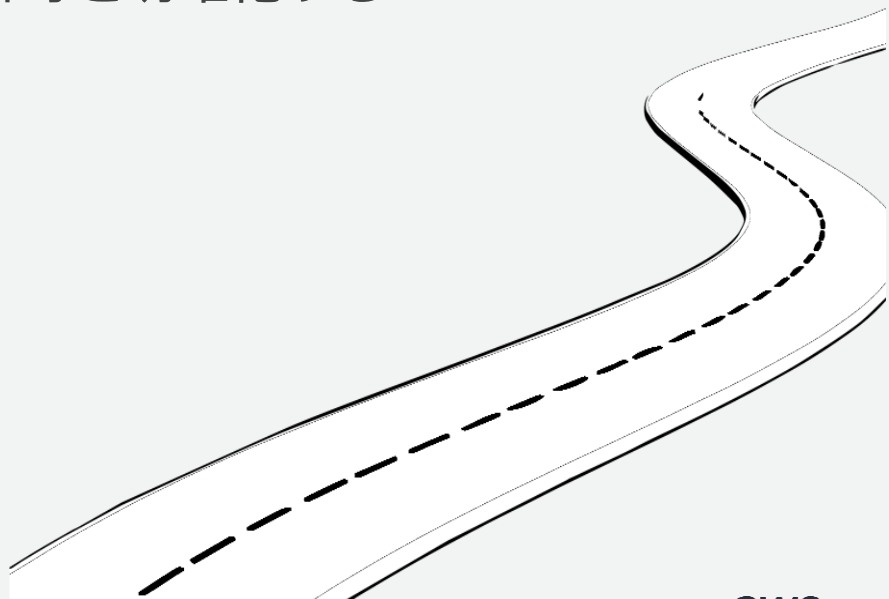
1. **ゴールを明確にする**

- ビジネス戦略を意識し目的を明確化する

2. ルートを決める

3. 仲間を集める

4. 道具を準備する



ビジネス戦略に合う移行目的を確認する

■ 一般的なクラウド移行の目的

コストダウン

従量課金により無駄を削減
スケールメリットによる低価格
ハードウェア更改費用削減



耐障害性

全世界の Availability Zones、
リージョンによる耐障害性の向上



アジリティ

実需に合わせたオンデマンドな利用
ビジネスニーズにあわせた素早い対応



運用負荷の低減

幅広いマネージドサービスの活用による運用負荷の低減



グローバル展開

全世界の Availability Zones、
リージョンによるグローバル展開の
容易性



イノベーションの加速

スモールスタートによる新領域開拓
マネージドサービスの活用による
開発スピードの向上



システムの特性による移行目的の違い

System of Record

「記録」が使命のシステム

- 記録や保管など、**正確性**が求められる
- バックエンドで**付加価値に繋がりにくい**
- 変更発生頻度は少ない
- Mode 1 ともいう

⇒ **安定性重視、コスト重視**

目的例：耐障害性の向上 等

System of Engagement

顧客との「繋がり」を作るシステム

- 改善を前提としたリリースが許容される
- 顧客要望を**迅速に反映**することが付加価値に繋がる
- **改善を繰り返す**
- Mode2ともいう

⇒ **開発スピード重視**

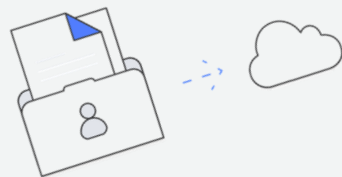
目的例：イノベーションの加速 等

移行目的を具体的なKPIへ

移行の成果を判定する為には定量的なKPI設定が必要

■ KPIの例

- **〇年**でTCOを**〇%**減少する
- リリース頻度が**月〇回**に増える
- 運用作業が**〇%**減少する
- **〇リージョン**でサービスを開始する



ゴール設定に影響する制約を把握する

制約を把握して優先度や調整可否を検討する。

■ 制約の例

- ソフトウェアのEOS
- レンタルデータセンターの契約更改期日
- 移行要員数
- ユーザーインターフェースの変更不可
- 取得済セキュリティ認証の維持



目的と制約を分離し、
ビジネス目的に合ったKPIを設定する

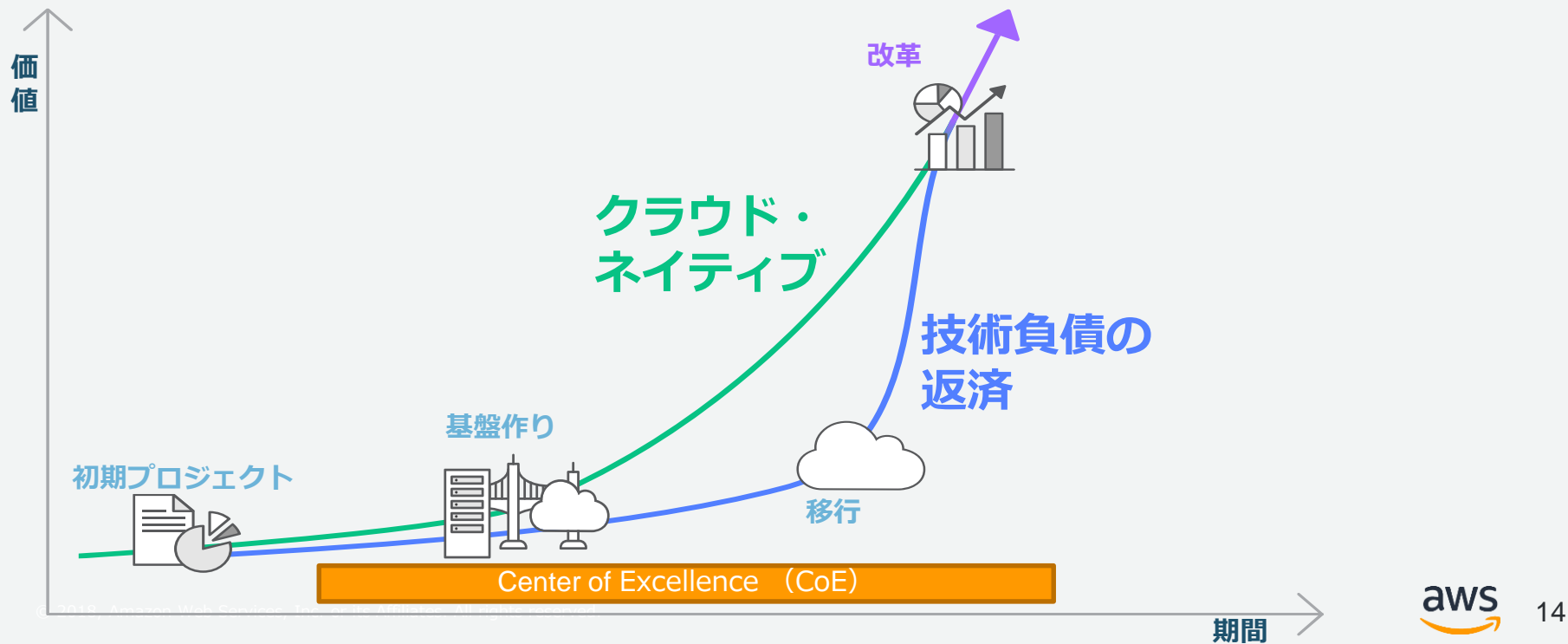
リーダーがすべき準備

1. ゴールを明確にする
2. **ルートを決める**
 - クラウドジャーニーの2つの道のりから、組織やシステムに合った行程を選択する
3. 仲間を集める
4. 道具を準備する



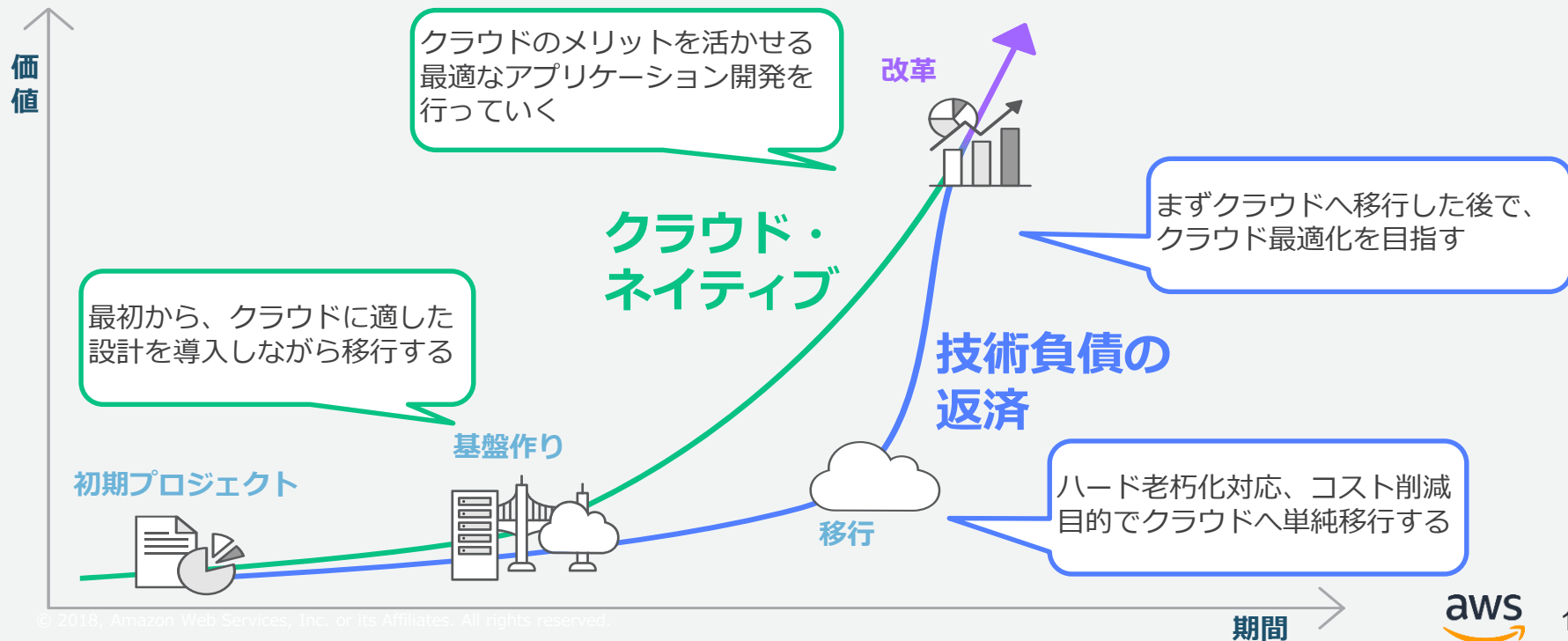
ルートを決める

クラウドへの道は大きく2つ



ルートを決める

道のりはそれぞれ・・・



移行方式の検討

移行方式（6R）

方式	概要	移行例
Rehost	OSやアプリケーションに変更を加えずそのまま移行	既存の仮想マシンをVM Importを利用してEC2に移行
Replatform	OSまたはDBの変更やアップグレード	WindowsやOracleのアップグレード オンプレDBからRDSへの変更
Repurchase	アプリケーションの買い替え	レガシーアプリをSaaS製品や商用の既製品などに置き換え
Refactor	移行時にクラウドネイティブなアプリケーションへ書き換え	ステートレス化し、AutoScalingを使用 DynamoDB, Lambda, Cognitoなどを活用したサーバレス化
Retire	オンプレ環境でサーバやアプリケーションを廃止する	使用状況の精査によって不要となったアプリやクラウド活用により不要となるサーバの廃止
Retain	オンプレ環境で引き続き運用する	ホストコンピュータやUNIXを使用する一部システムをオンプレで引き続き使用

移行方式の検

移行方式 (6R)

方式	概要	特徴
Rehost	OSやアプリケーションコンテナに変更を加えずそのまま移行	既存の仮想マシンをAMI Importを利用してEC2に移行
Replatform	OSまたはDBの変更やアップグレード	WindowsやOracleのアップグレード オンプレDBからRDSへの変更
Repurchase	Amazonの既製品などに	
Refactor	移行時にリケーシ	を使用 などを活用した
Retire	オンプレ環境を廃止する	ったアプリやク サーバの廃止
Retain	オンプレ環境で引き続き運用する	ホストコンピュータやUNIXを使用する一部システムをオンプレで引き続き使用

まずはそのまま(Lift&Shift)

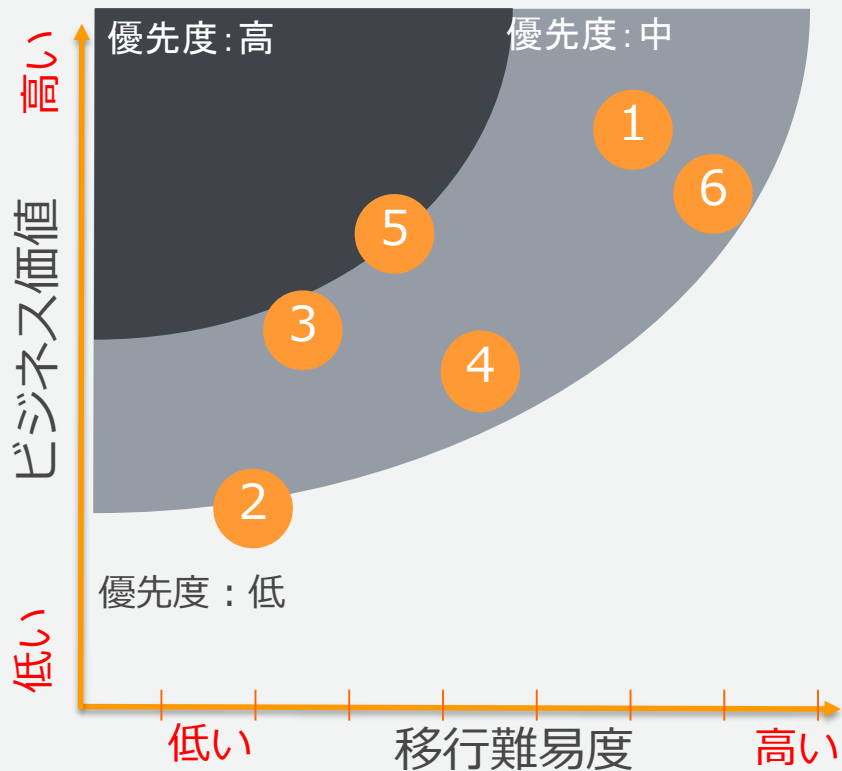
現状のままEC2に移行しオンプレのリソース不足やHW障害対応から解放される

最適化

マネージドサービスを取り込み、運用負荷の軽減やスケーラビリティの向上を狙う

クラウド化施策の評価例

お客様状況に合わせた施策立案とクラウド化ロードマップ検討



No	クラウド化候補	概要
1	DRシステム	DRシステムを必須の保険と考えるとクラウド化のコスト削減効果は大きいですが、現行業務の稼働に関わるため難易度が高い。
2	バックアップ/ リストア	ビジネス価値は相対的に低い。メディア管理等、コスト削減が目的。
3	VMware	高度な使い方をしないケースが多く、ライセンス費用削減効果を期待。仮想化であるため比較的移行難易度は低い。
4	ORACLE RAC	SLA視点からRACまでの機能を必要としないケースもある。ライセンス費用削減効果大きい。
5	ハイエンドUNIX	Linuxへの移行を想定し、難易度を中と想定。HW運用保守費用の削減効果は大きい。
6	メインフレーム	難易度は高いが、大幅なHW運用保守費用の削減

リーダーがすべき準備

1. ゴールを明確にする
2. ルートを決める
3. **仲間を集める**
 - 必要な情報を提供してステークホルダーの協力を仰ぐ
4. 道具を準備する



仲間を集める



あなた

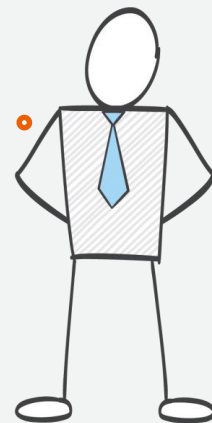
クラウド導入しましょう！

よく分からないものは
怖くて使えない



同僚

使ってみたいけど
社内で使えるのかな・・・



上司

仲間を集める

■ AWSの情報を共有する

- 社内でAWS勉強会を開く
- AWSがSNSや公式サイトなどで発信する情報を社内に展開する

■ 社外の声共有する

- AWSユーザが登壇するイベントに参加する
- AWSユーザのコミュニティイベントに参加する



本質議論の為に必要な知識を広める
AWSユーザの生の声を聞いて不安を解消する

経営層の目的を理解する

上司の目的 = さらに上司の目的 = 経営層の目的 を理解する

■ 目的例

- 市場変化への迅速な対応
- 業務継続性の向上
- キャッシュフローの改善
- 新規ビジネスの開拓
- セキュリティリスクの低減

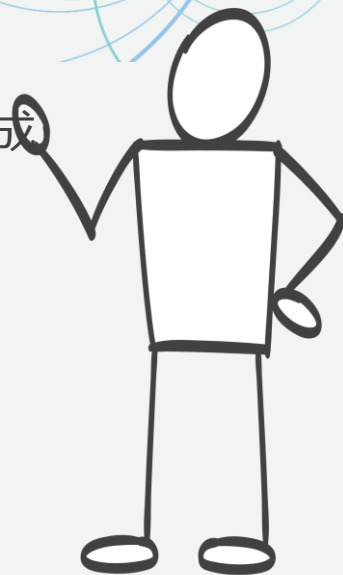


目的に対するクラウドのメリットを提示する

経営層の目的に対してクラウドのメリットを提示する

■クラウドのメリット

- マネージドサービス活用による開発スピードの向上
- マルチアベイラビリティゾーン (AZ) による高可用性構成
- 初期投資不要な従量課金制によるキャッシュフロー改善
- クラウド自体の新規領域への投資、サービス増加
- 各種セキュリティ認証の取得



目的に対するクラウドのメリットを提示する

経営層の目的に対してクラウドのメリットを提示する

■クラウドのメリット

- マネージドサービス活用による開発スピードの向上
- マルチアベイラビリティゾーン (AZ) による高可用性構成
- 初期投資不要な従量課金制によるキャッシュフロー改善
- クラウド自体の新規領域への投資、サービス増加
- 各種セキュリティ認証の取得

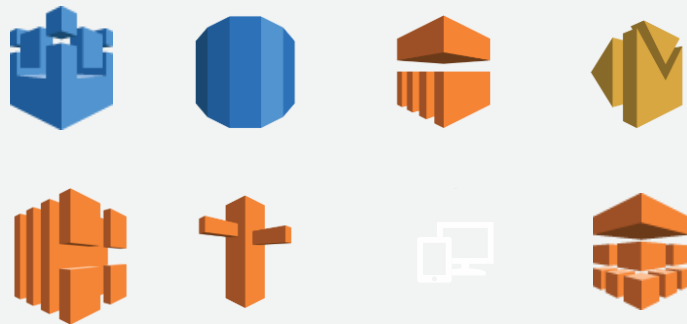


マネージドサービスを活用し開発に注力する

数クリックで対象のソフトウェアが導入されたリソースが起動する為、環境構築期間の短縮が可能。ビジネスの本質ではない作業をAWSにアウトソースすることで運用負荷が低減し、サービス開発に注力可能。

■ AWSサービスの一例

- ロードバランサー(ELB)
- リレーショナルDB (RDS)
- NoSQL DB (DynamoDB)
- Hadoop/Spark (Elastic MapReduce)
- メールサーバ (SNS),DNSサーバ(Route 53)
- VDI (WorkSpaces)
- IoT (AWS IoT)
- 機械学習(Amazon SageMaker)



目的に対するクラウドのメリットを提示する

経営層の目的に対してクラウドのメリットを提示する

■クラウドのメリット

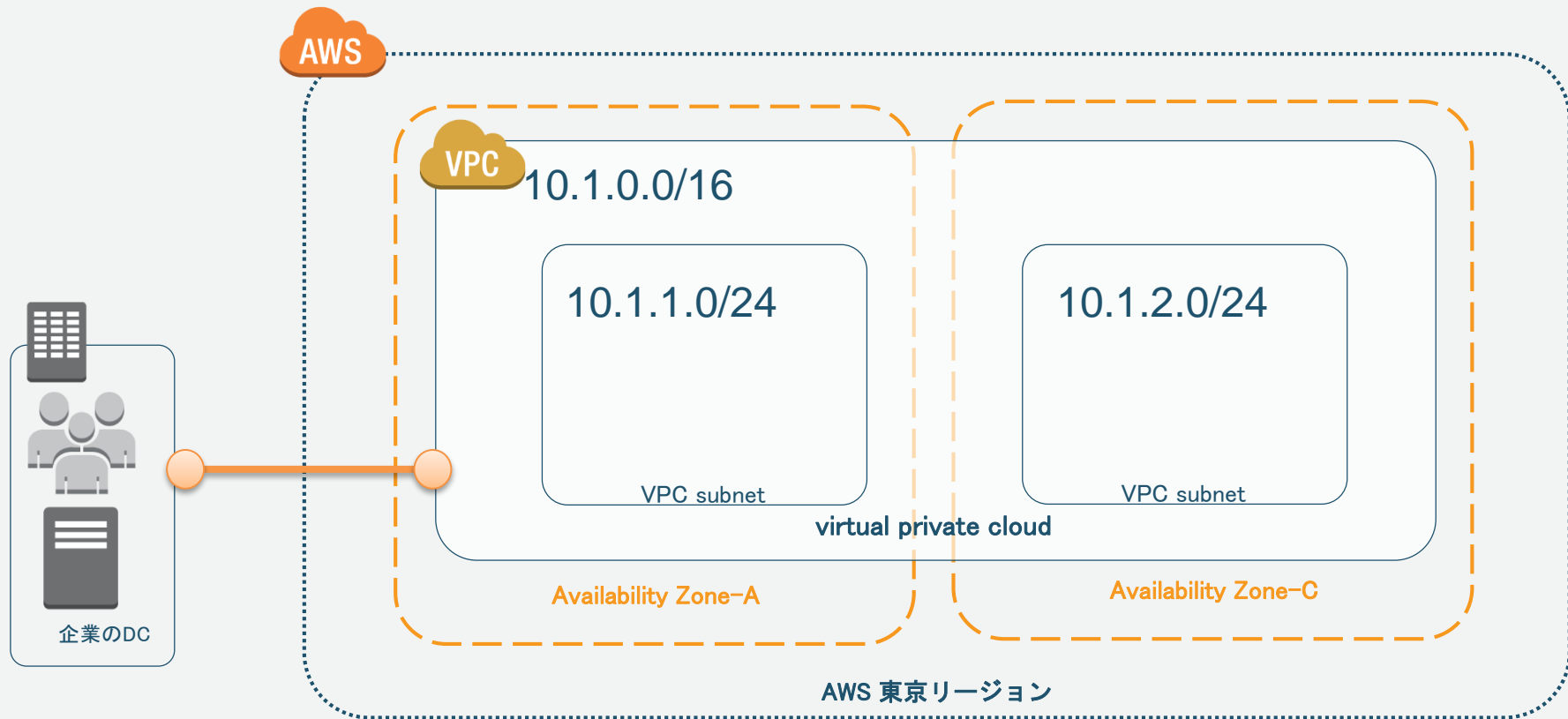
- マネージドサービス活用による開発スピードの向上
- マルチアベイラビリティゾーン (AZ) による高可用性構成
- 初期投資不要な従量課金制によるキャッシュフロー改善
- クラウド自体の新規領域への投資、サービス増加
- 各種セキュリティ認証の取得



クラウドにおける可用性の考え方

- ハードウェアやネットワークの障害・故障はAWS側で対応する
- 一方で、全てが故障する可能性があるかと仮定して設計することが重要（Design for failure）

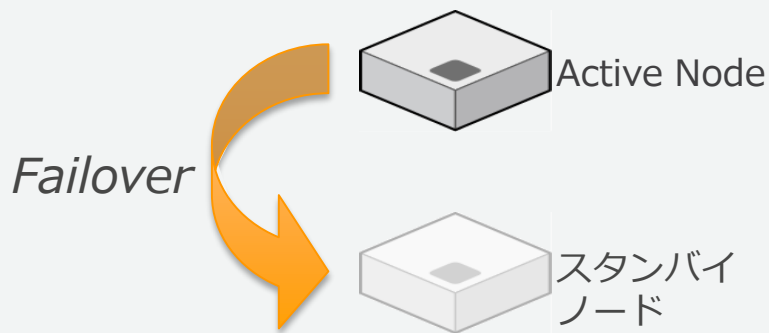
マルチAZ構成で可用性を担保する



コールド・スタンバイ機は不要（シングルAZ含む）

インスタンス再起動でスタンバイの代替が可能

従来のアクティブスタンバイ構成



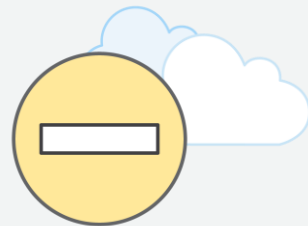
- 普段は利用しなくてもスタンバイノードの準備が必要
- スタンバイノードのメンテナンスも必要

AWSでの代替方法



- スタンバイノードの準備は不要
- スタンバイノードの費用やメンテナンスも不要

上司の不安を理解する



■ 上司の不安

- 実績がない

維持費の削減効果以上に移行費用が掛かり**TCOが増加する**のが不安
移行費用増加による**キャッシュフローの悪化**が不安
ナレッジがなく**期待した効果が出るか**不安

- 頼れる有識者がいない

クラウドでの安定・安全な設計が分からず**安定稼働するか**不安
困った時に誰に聞けばいいのか分からない

- ナレッジが活かさない

既存ナレッジが活用できず**運用負荷が上がる**のが不安
新しい技術の習得に時間を要して**開発スピードが低下する**のが不安

不安を解消する情報を提供する



■ 不安の解消方法

- 実績がない

AWSの支援体制を活用（AWS Professional Services、パートナー）
AWSは様々なナレッジを公開。
PoCで不安を解消。

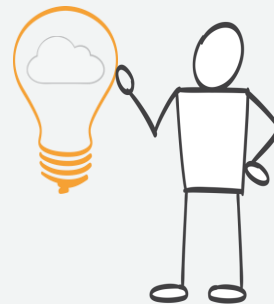
- 頼れる有識者がいない

AWSの支援体制を活用
（無償の個別相談会、AWS Professional Services、AWSサポート）

- ナレッジが活かさない

クラウドでもベースの技術は変わらない。
AWSの支援体制を活用（AWSトレーニング）

不安を解消する情報を提供する



■ 不安の解消方法

- 実績がない

AWSの支援体制を活用（AWS Professional Services、パートナー）

AWSは様々なナレッジを公開

PoCで不安を解消

- 頼れる有識者がいない

AWSの支援体制を活用

（無償の個別相談会、AWS Professional Services、AWSサポート）

- ナレッジが活かさない

クラウドでもベースの技術は変わらない







AWSの支援体制を活用（AWSトレーニング）

AWS Cloud Adoption Framework (AWS CAF)

AWSではクラウドの導入を検討する際に考えるべき項目を、6つのポイントに整理しています。

このポイントにより、抜け漏れのない導入ロードマップ作成が可能です。

これらは、AWSが膨大なクラウド導入プロジェクトを実施してきた経験に基づいて開発されたフレームワークです。

 BUSINESS	 PLATFORM
 PEOPLE	 SECURITY
 GOVERNANCE	 OPERATIONS

<https://aws.amazon.com/professional-services/CAF/>

AWS Cloud Adoption Framework (AWS CAF)

ビジネス - ビジネスニーズに対応する為、アーキテクチャ的なアプローチを用いて、**ビジネス影響**を定義し、伝達し、測定する。

人 - AWSクラウド環境を導入し管理するために必要な**組織**、**スキル**、**コンピテンシー**を定義する。

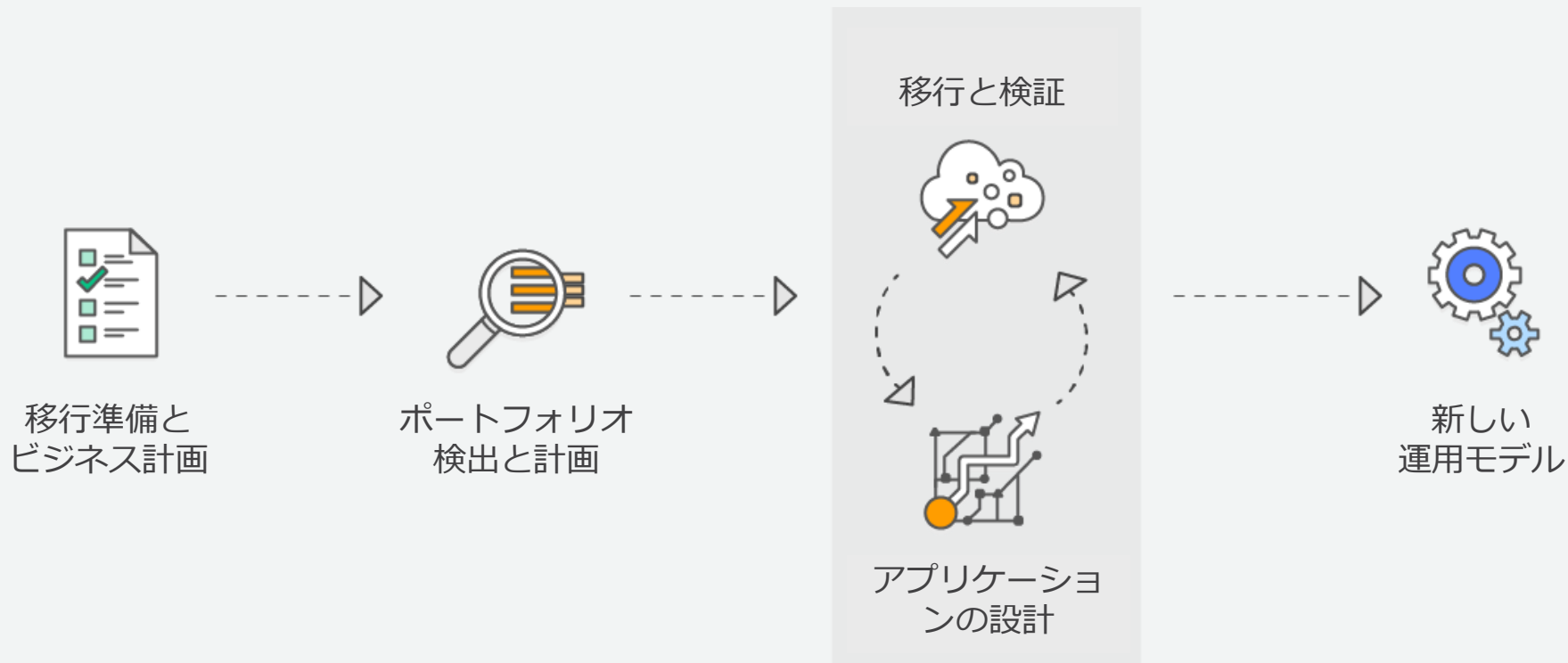
ガバナンス - 期待するビジネス結果を予算内期限内に実現するために**ポートフォリオ**と**プログラム**、**プロジェクト**を管理する。

プラットフォーム - AWSクラウドの**テクノロジーサービス**そのもの。テクノロジーサービスを最適なかたちで実装するための定型パターン、ガイダンス、ツールを提供する。

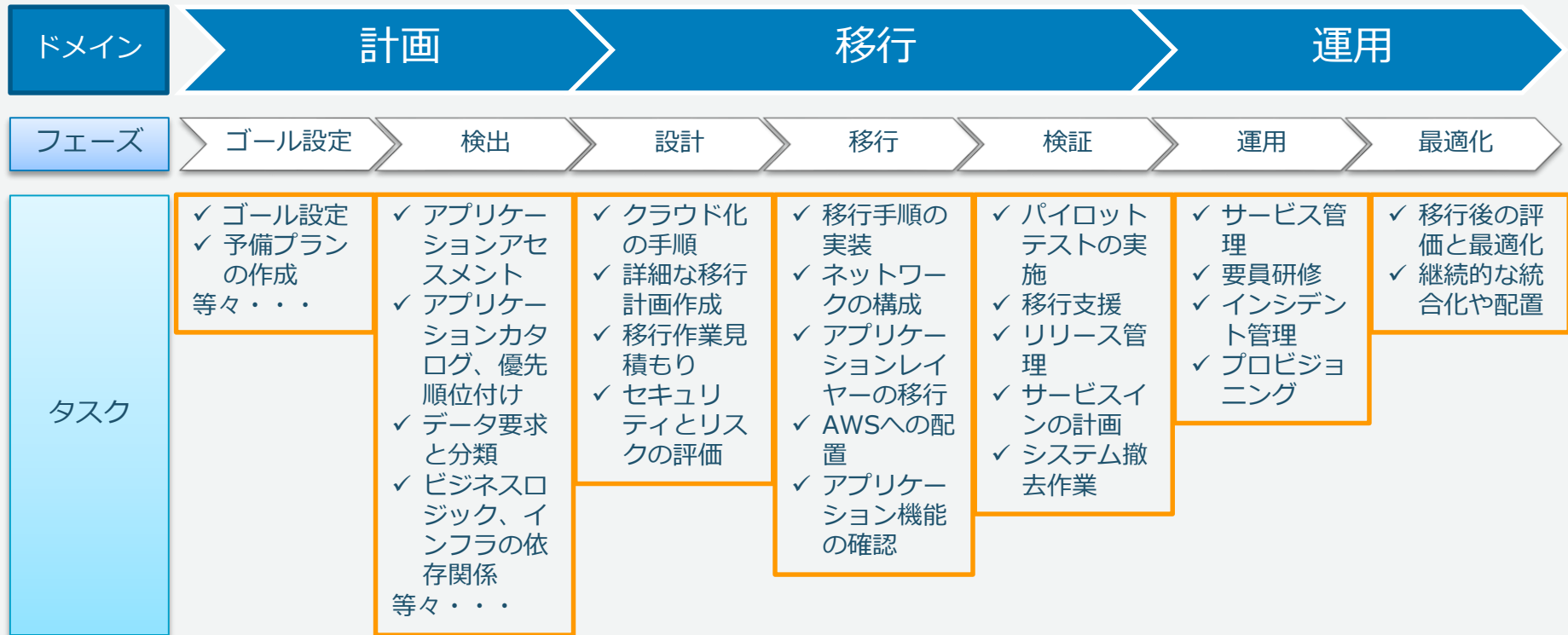
セキュリティ - 求められるレベルの**セキュリティ**、**ガバナンス**、**リスク管理**の要求レベル定義し実装します。

運用 - ビジネス戦略を実現するようなアジャイルでスケーラブルなクラウド環境を管理するために必要な仕組みとアプローチを表しています。最適な運用**サービス管理**のためのプロセスやガイダンス、ツールを提供する。

移行プロセス



移行プロセス



AWS Well-Architected Framework

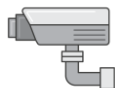


クラウドアーキテクチャ設計・運用の“考え方”と“ベストプラクティス”

- AWSのソリューションアーキテクト(SA)が、数多くの経験から作成したもの。
- CAFが組織にフォーカスしてクラウド導入時の検討項目を示しているのに対して、Well-Architected Framework は、システムのアーキテクチャにフォーカスしたベストプラクティスを提示。
- クラウドでの設計原則とセキュリティ、信頼性、パフォーマンス効率、コストの最適化、運用性についてのベストプラクティスが質問形式で記載されています。
- AWSの進化と共に、常に改良されつづけています



セキュリティ



信頼性



パフォーマンス効率



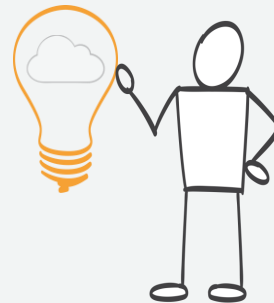
コストの最適化



運用性



不安を解消する情報を提供する



■ 不安の解消方法

- 実績がない

AWSの支援体制を活用（AWS Professional Services、パートナー）
AWSは様々なナレッジを公開
PoCで不安を解消

- 頼れる有識者がいない

AWSの支援体制を活用
（無償の個別相談会、AWS Professional Services、AWSサポート）

- ナレッジが活かさない

クラウドでもベースの技術は変わらない
AWSの支援体制を活用（AWSトレーニング）

クラウド導入で変わらないこと

業界標準・一般的なテクノロジーで構成されたサービス群

- ❏ Intel CPUの上で動く標準的なOS環境
RedHat Enterprise Linux, Windows Server, Amazon Linux等
- ❏ OSの管理権限が利用可能
任意のアプリケーションを導入して利用可能
- ❏ 標準的なTCP/IP通信
ポート、サブネット等の考え方は同じ

これまでの知識・技術を活かしたシステム構築が可能

クラウド導入で変わらないこと

データの統制権はユーザにある

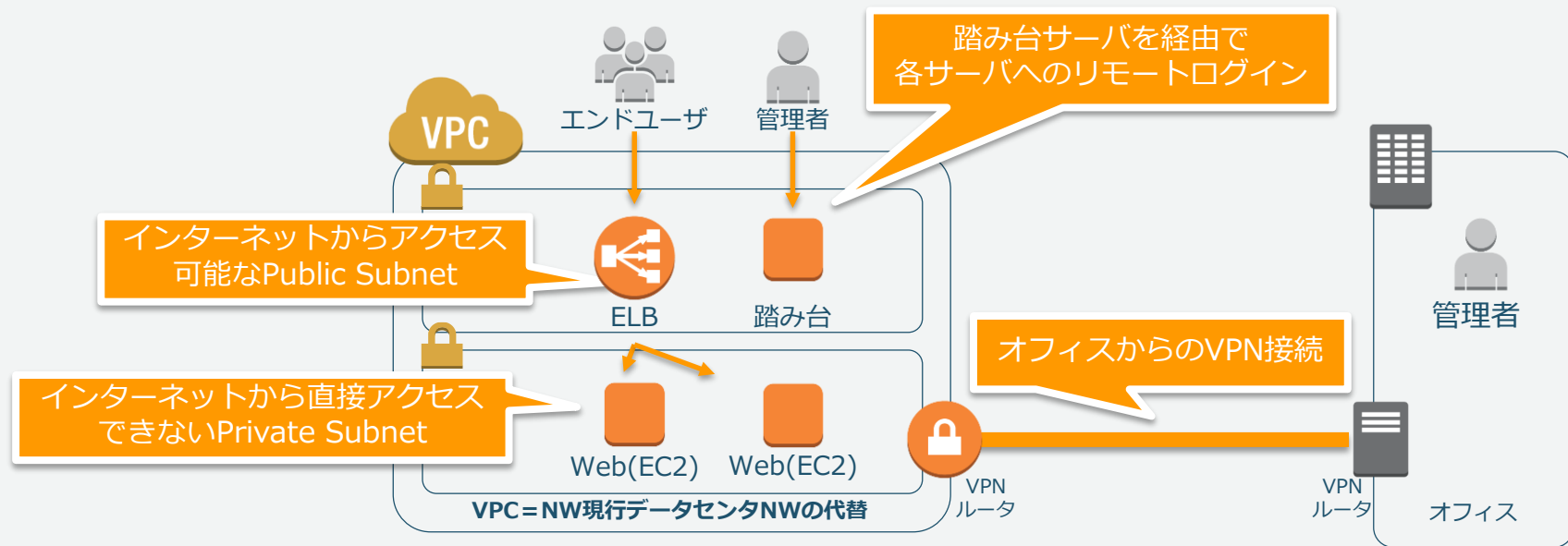
- ❏ AWSにデータを入れるのも出すのも常に自由
- ❏ 暗号化も自由に実施可能
- ❏ AWSが勝手に別リージョンへデータを動かすことはない



データの統制もこれまで通り

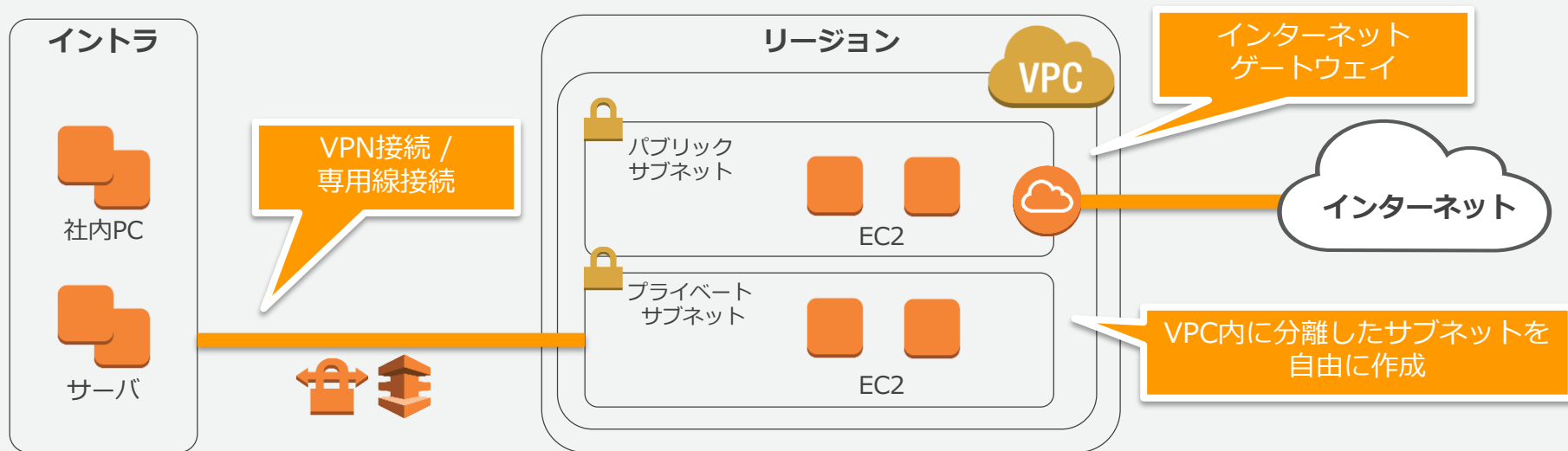
クラウド導入で変わらないこと

オンプレミス環境に類似した自社専用の仮想NWを構築可能



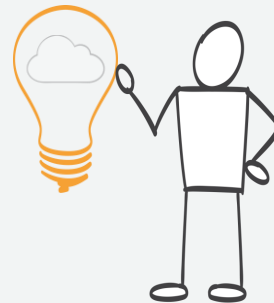
クラウド導入で変わらないこと

イントラ & 既存DCの拡張としてクラウドを利用可能



AWS上にプライベートのアドレス空間を作成し、
プライベートな接続方法で既存NWを拡張可能

不安を解消する情報を提供する



■ 不安の解消方法

- 実績がない

AWSの支援体制を活用 (AWS Professional Services、パートナー)

AWSは様々なナレッジを公開

PoCで不安を解消

- 頼れる有識者がいない

AWSの支援体制を活用 (無償の個別相談会、AWSサポート)

- ナレッジが活かさない

クラウドでもベースの技術は変わらない

AWSの支援体制を活用 (AWSトレーニング)

AWS が提供する有償サービス

📦 AWS Professional Services

AWSの提供する**コンサルティングサービス**です。数百のお客様の AWS導入をあらゆる段階サポートしてきた業界の専門知識を活用してお客様の組織をサポートします。



📦 AWS サポート

AWS サポートでは、稼働中または稼働予定のユースケースに基づき、専用ツールと専門知識によって、お客様の成功をサポートします。サポートプランによって**24時間365日のサポートも選択可能**です。



📦 AWS トレーニング

総合的なトレーニングを提供し、組織のイノベーションの加速、より良いソリューションの開発、目標達成の効率化を支援します。学習フロー、オンサイトトレーニング、仮想トレーニングを提供することによって、それぞれの組織に応じた学習戦略の開発を支援します。



AWS パートナーネットワーク (APN)



📦 AWS 移行コンピテンシーパートナー

APNパートナーの中で、複雑な移行プロジェクトの各段階を通じて、AWSに移行する際に必要な支援ができることが**認定されたパートナー**です。移行コンピテンシーパートナーには下記のカテゴリーがあります。

- 移行デリバリーパートナー
- 移行コンサルティングパートナー
- 調査と計画のための移行技術パートナー
- ワークロードモビリティのための移行技術パートナー
- アプリケーションプロファイリングのための移行技術パートナー
- データ移行の技術パートナー

<https://aws.amazon.com/jp/migration/partner-solutions/>



AWS が提供する各種イベント

AWS 個別相談会

AWSのソリューションアーキテクト（SA）が設計についてアドバイスを行う無料の相談会を実施しています。弊社オフィスまたは電話会議での対応が可能です。

オンラインセミナー

AWS Black Belt Online Seminar（本セミナー）に加え、不定期にオンラインセミナーを開催しています。

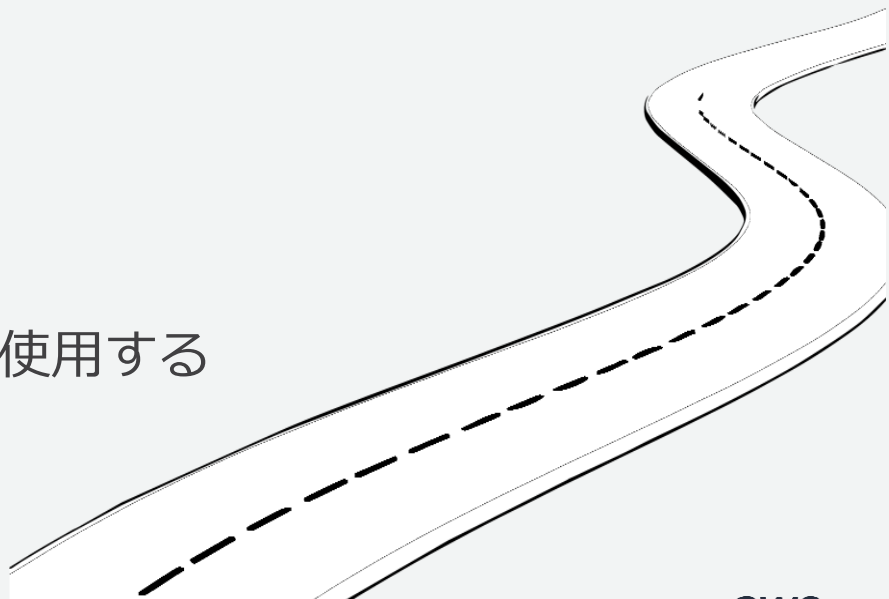
その他 イベント

AWS 専用線アクセス体験ラボ や、ユーザーに登壇頂くセミナーなど各種イベントを企画しています。

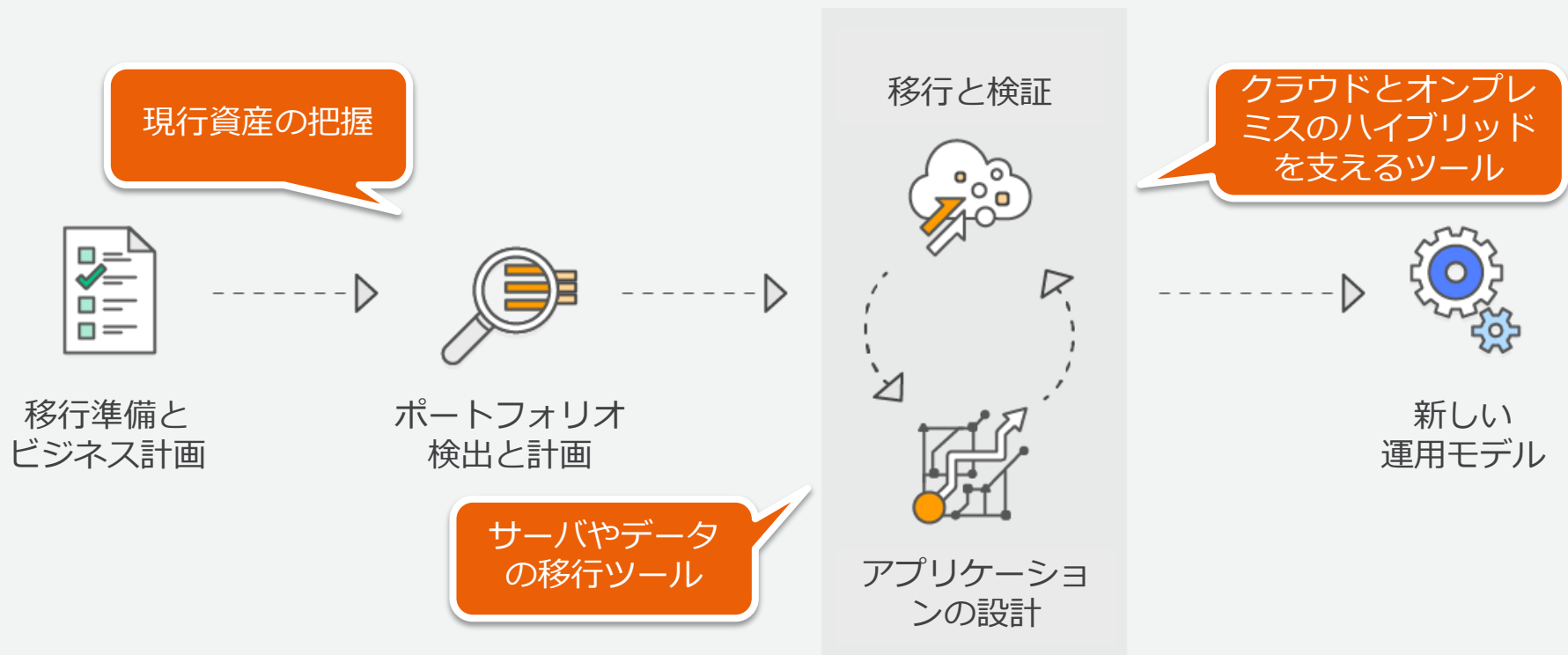
<https://aws.amazon.com/jp/about-aws/events/>

リーダーがすべき準備

1. ゴールを明確にする
2. ルートを決める
3. 仲間を集める
4. **道具を準備する**
 - 必要な移行ツールを知って使用する



移行プロセスから必要なツールを把握する



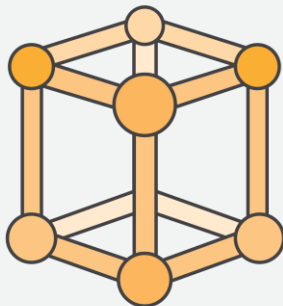
現行資産の把握ツール

AWS Application Discovery Service

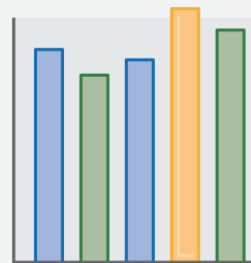
データセンターで実行されているアプリケーションの自動検出



アプリケーションの
一覧を洗い出し



アプリケーションの
依存関係をマッピング

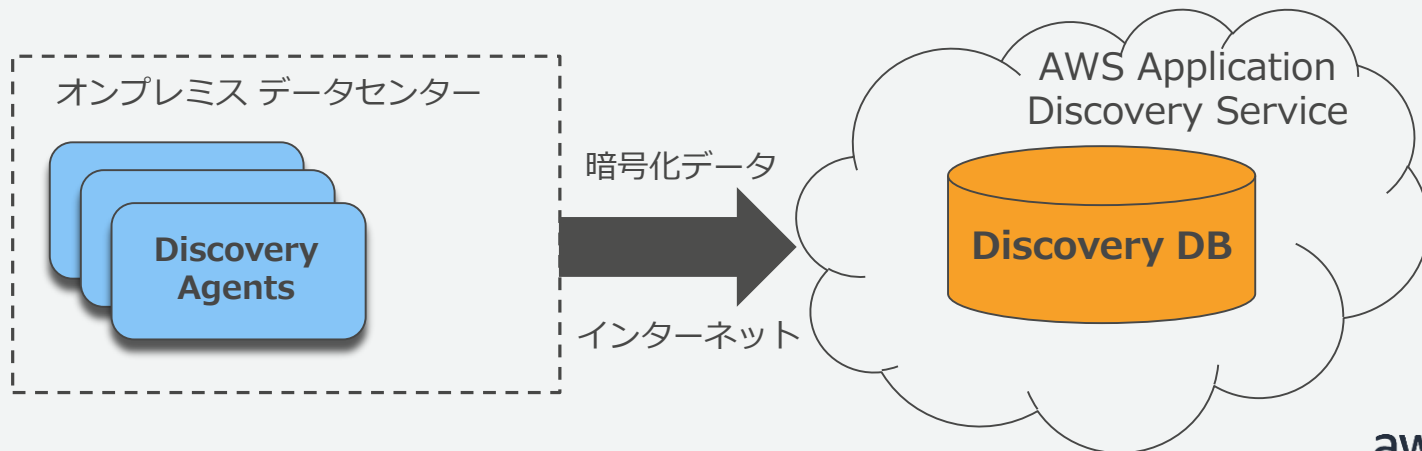


アプリケーションの
性能を測定

AWS Application Discovery Service

概要

- 移行元ホストにエージェントを導入
 - WindowsとLinuxをサポート (Windows Server、Ubuntu、Red Hat、CentOS、Amazon Linux、SUSE)
- システムの一覧、依存関係および性能情報を収集
 - セキュアなデータとして収集し、保管
 - 収集したデータへのAPIアクセス
 - CSVまたはXML形式での出力
 - 3rdパーティー製の移行ツールや可視化ツールにインポート可能



サーバ移行ツール

Server Migration Service (SMS)

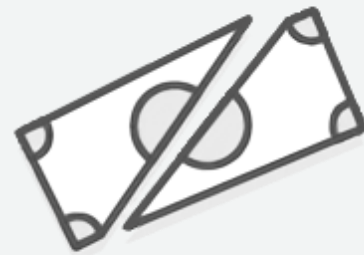
オンプレミスにある仮想マシンをAWS上にコピー



導入後の操作は
AWSマネージメント
コンソールやCLIから



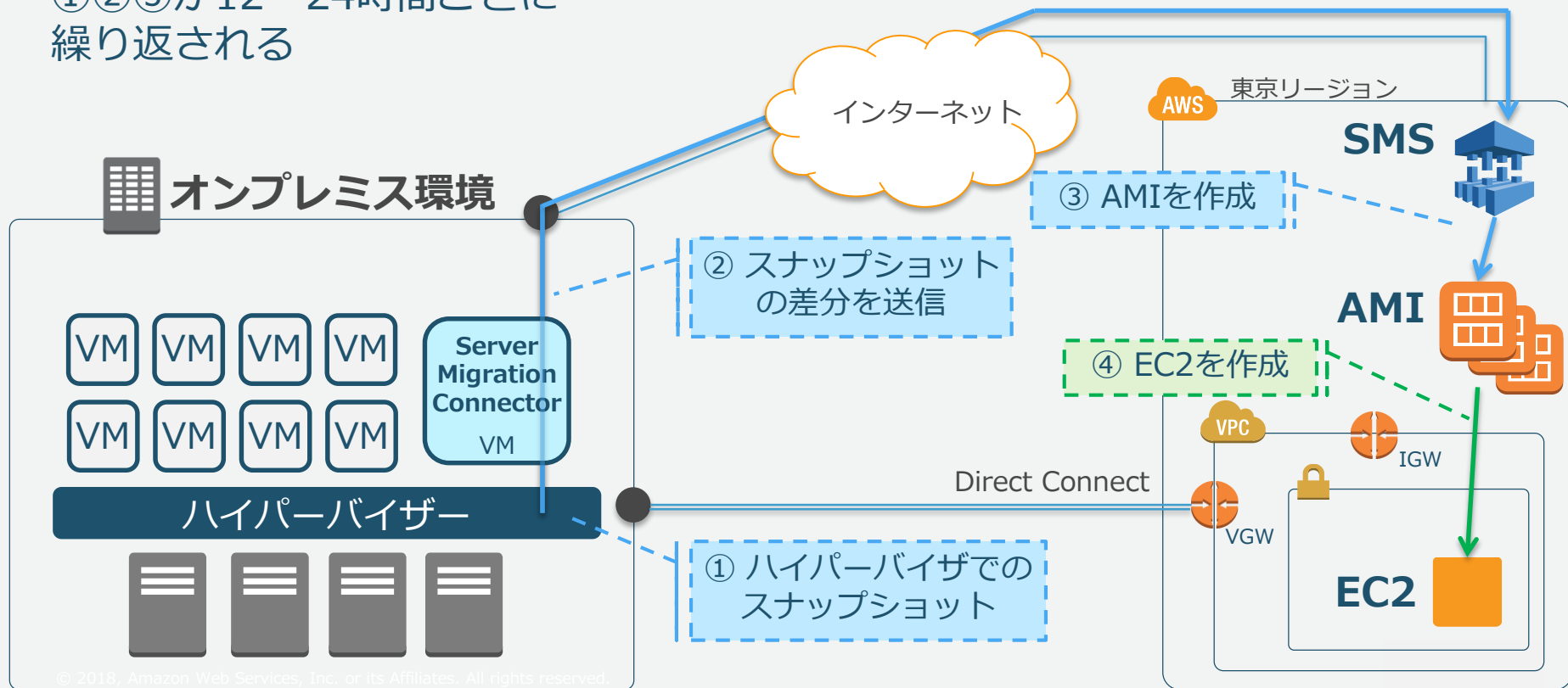
**ダウンタイムを
最小化**



作成される
EBSスナップショット
の料金のみで利用可

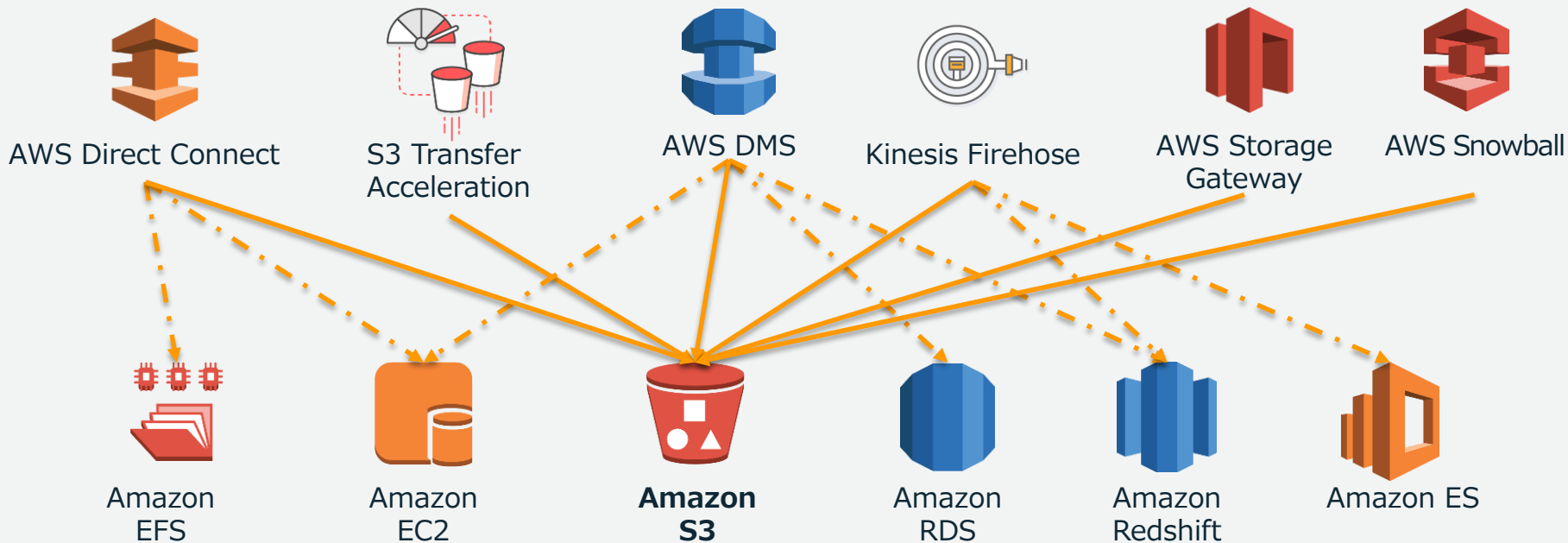
Server Migration Service (SMS)

①②③が12～24時間ごとに
繰り返される



データ移行ツール

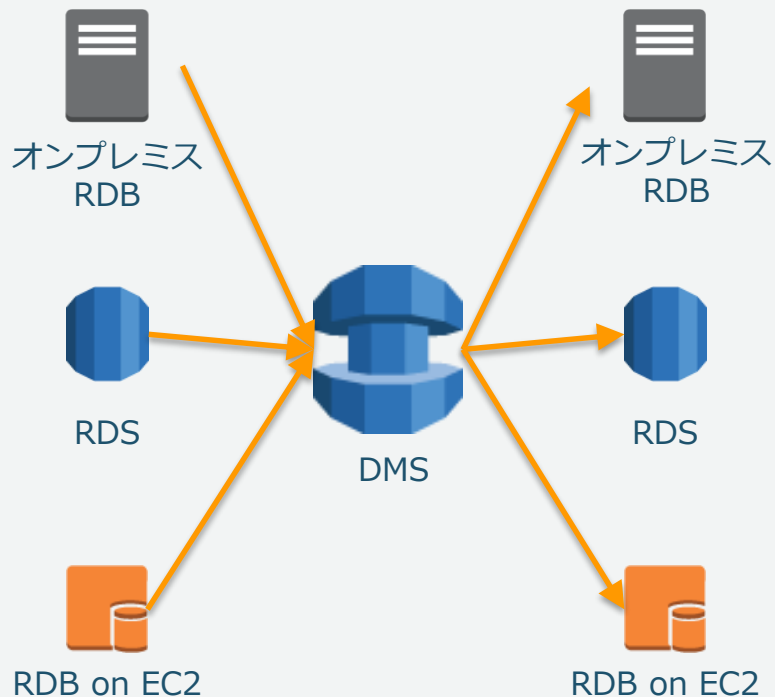
AWSへのデータ移行サービス



移行対象によって様々なデータ移行サービスを提供
S3に移行すれば様々なサービスと連携可能

AWS Database Migration Service (DMS)

- 📦 RDBの移行を支援するサービス
- 📦 セットアップ・利用が容易
- 📦 使った分だけの安価な費用
- 📦 異種DB間のデータ移行も対応
- 📦 スキーマ変換を補助するツールの提供
- 📦 低負荷で継続的なレプリケーション



※オンプレ to オンプレは未サポート

AWS Snow ファミリー



Snowball

ペタバイトスケール
のデータ移行



Snowball Edge

ハイブリッド/エッジワー
クロードのためのコン
ピュート&ストレージ



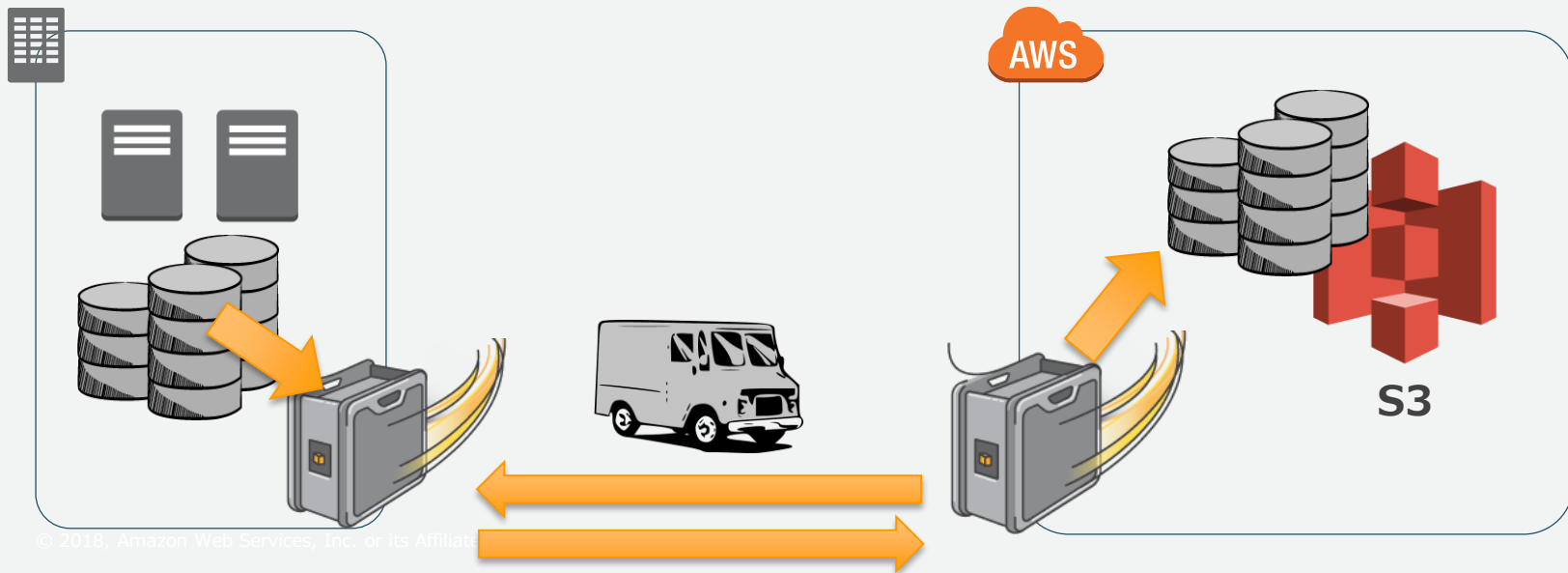
Snowmobile

エクサバイトスケー
ルのデータ移行

AWS Snowball

「ハードウェアアプライアンス」を利用してオンプレミスクラウド間の大量データ移行を高速化

- 80TBの容量をもつ物理アプライアンスを配送
- オンプレミスクラウド間の回線に依存しないデータ転送を実現



(参考)50TBの転送にどれ位時間がかかるのか？

Snowballを利用するケース

ネットワーク経由

理想的なケースでは
運搬も含めて1週間ー10日程度

- ジョブのサブミット
 - 出荷までに1営業日
- 配送業者による配送
 - 翌々日配達
- (お客様による)Snowballの受け取り
- データの転送
- 配送業者による集荷
 - 翌日 or 翌々日配達
- (AWS側での)Snowball の受け取り
 - AWS側のIngest開始に1営業日
 - SnowballからS3への転送は1日から2日

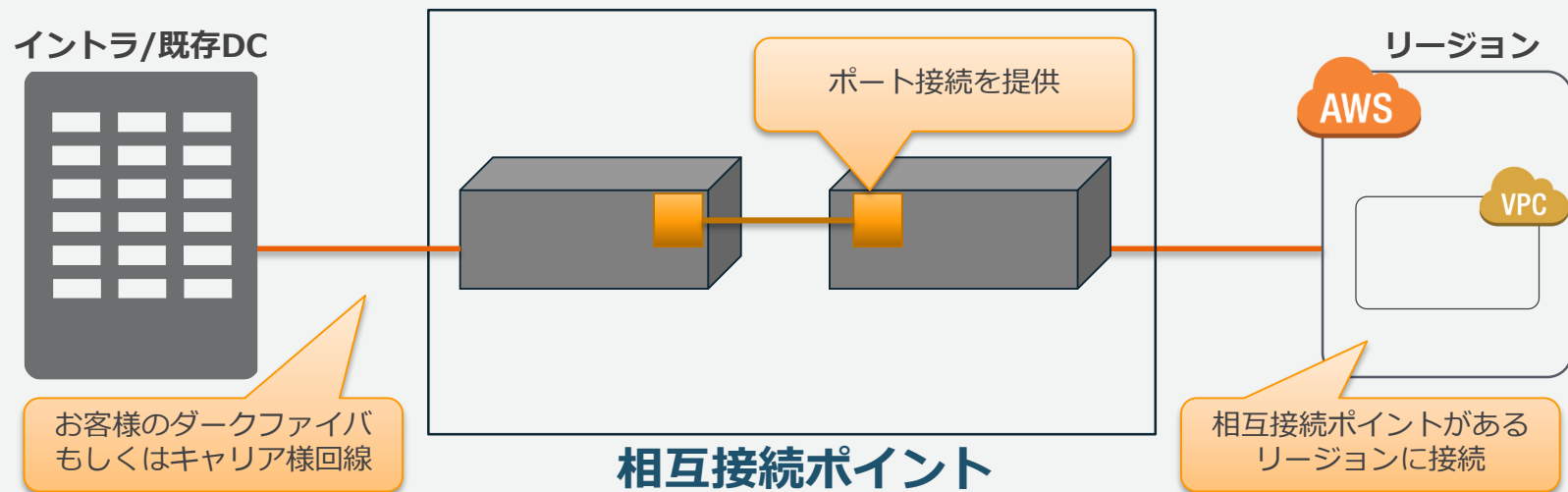
占有率	回線速度		
	1Gbps	500Mbps	300Mbps
25%	19 日	38 日	63 日
50%	9 日	19 日	32 日
75%	6 日	13 日	21 日

複数のSnowball アプライアンスを
利用した並列転送も可能

オンプレとクラウドのハイブリッド構成を 支えるツール

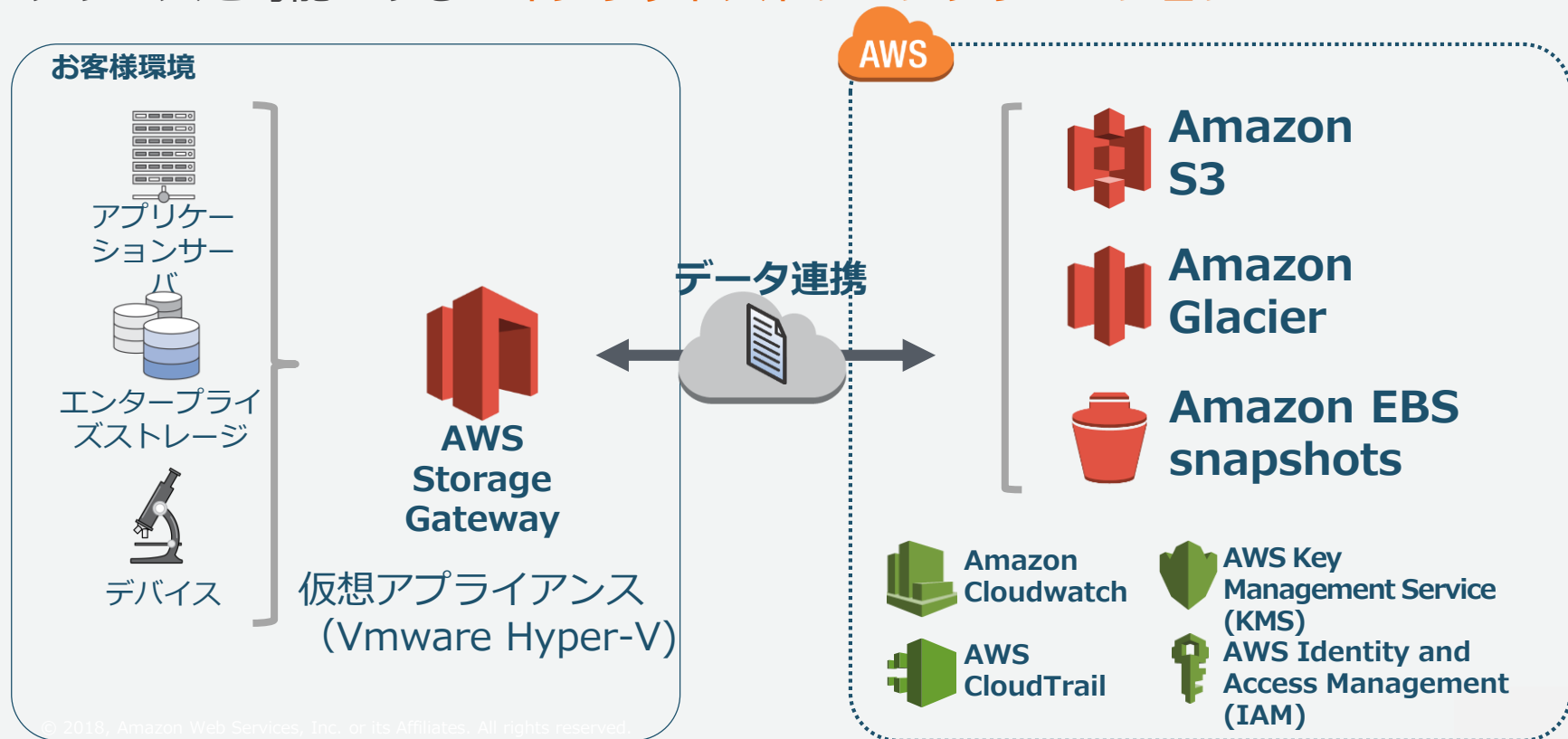
AWS Direct Connect

AWSとお客様設備（データセンター、オフィス、またはコロケーション）の間に**専用線**を利用したプライベート接続を提供するサービス



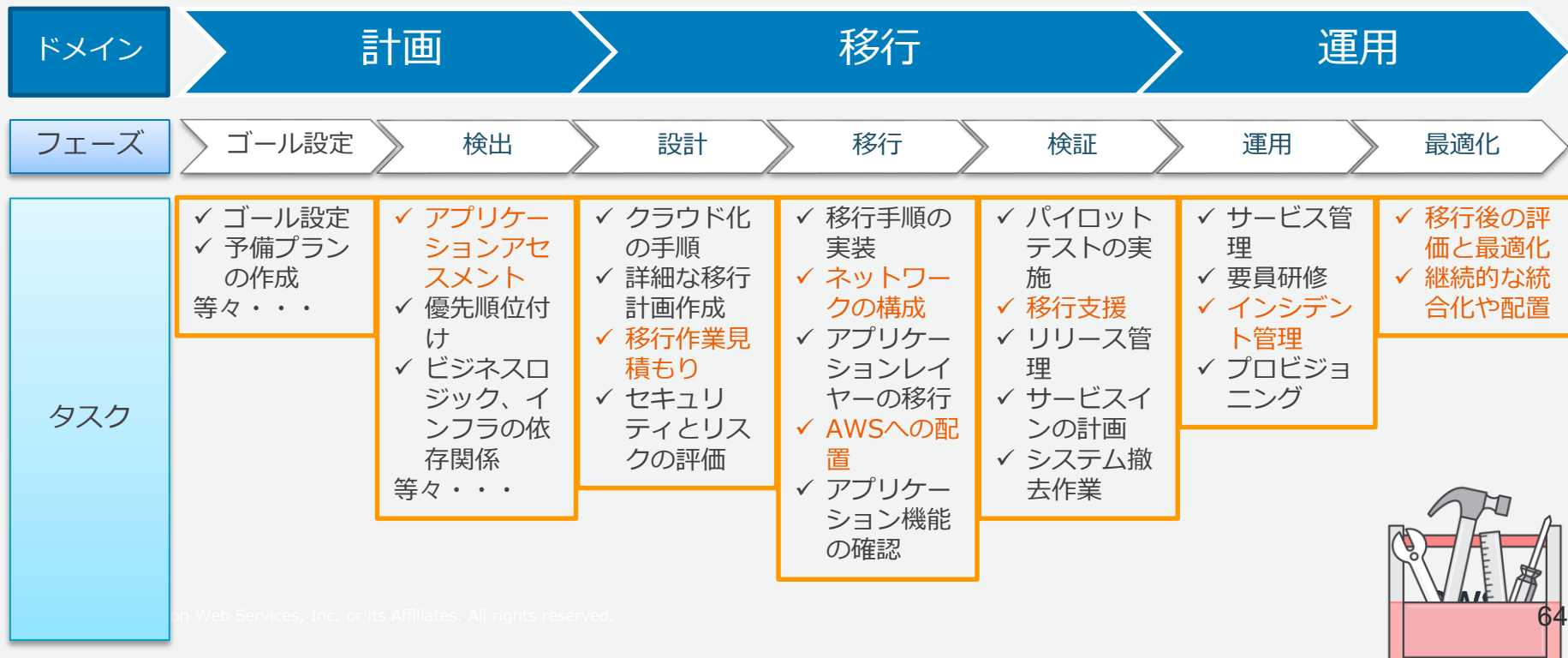
AWS Storage Gateway

標準的なストレージプロトコルを利用してAWSのストレージサービスへのアクセスを可能にするハイブリッドストレージソリューション



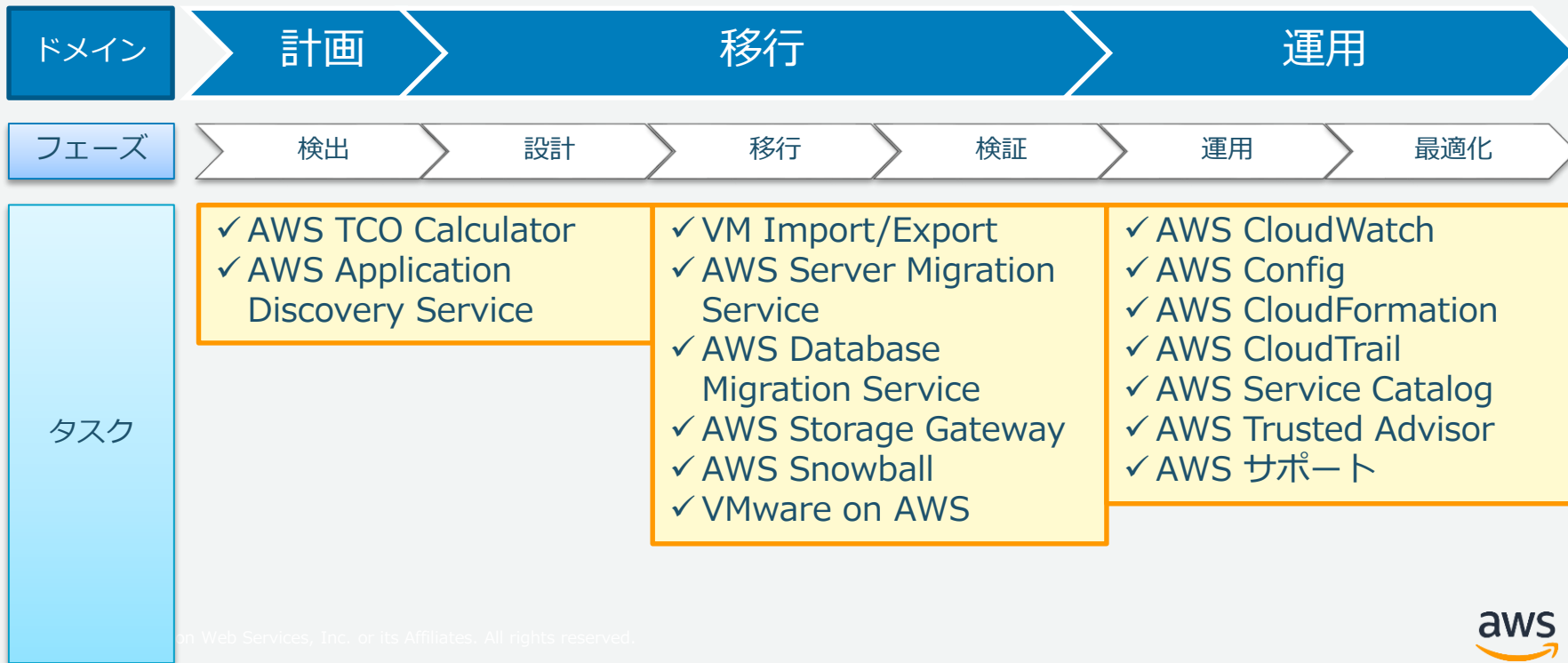
移行プロセスから必要なツールを把握する

移行プロセスから必要なツールを考える



必要な道具を把握する

AWSの提供する移行関連サービス



本日のまとめ

📦 ゴールを明確にする

- ビジネス戦略を意識し目的を明確化する

📦 ルートを決める

- クラウドジャーニーの2つの道から、組織やシステムに合った行程を選択する

📦 仲間を集める

- 必要な情報を提供してステークホルダーの協力を仰ぐ

📦 道具を準備する

- 必要な移行ツールを知って使用する

オンラインセミナー資料の配置場所

AWS クラウドサービス活用資料集

- <https://aws.amazon.com/jp/aws-jp-introduction/>

			
サービス別資料	ソリューション別資料	業種別資料	その他の資料
無料オンラインセミナー「Black Belt Online Seminar」のサービスカット資料他、AWSのTechメンバーによる各サービスの解説資料がご覧いただけます。	無料オンラインセミナー「Black Belt Online Seminar」のソリューションカット資料他、特定のソリューションについてのAWS活用方法がご覧いただけます。	無料オンラインセミナー「Black Belt Online Seminar」のインダストリーカット資料他、特定の業界のユースケースがご覧いただけます。	イベントに関する資料やアップデート情報などがご覧いただけます。

Amazon Web Services ブログ

- 最新の情報、セミナー中のQ&A等が掲載されています。
- <https://aws.amazon.com/jp/blogs/news/>

公式Twitter/Facebook AWSの最新情報をお届けします



@awscloud_jp



検索

もしくは

<http://on.fb.me/1vR8yWm>

最新技術情報、イベント情報、お役立ち情報、
お得なキャンペーン情報などを日々更新しています！

AWSの導入、お問い合わせのご相談

AWSクラウド導入に関するご質問、お見積、資料請求をご希望のお客様は以下のリンクよりお気軽にご相談下さい。

<https://aws.amazon.com/jp/contact-us/aws-sales/>

<p>お問い合わせ</p> <hr/> <p>日本担当チームへのお問い合わせ ></p> <hr/> <p>関連リンク</p> <p>フォーラム</p>	<h2>日本担当チームへのお問い合わせ</h2> <p>AWS クラウド導入に関するご質問、お見積り、資料請求をご希望のお客様は、以下のフォームよりお気軽にご相談ください。平日営業時間内に日本オフィス担当者よりご連絡させていただきます。</p> <p>※ご請求金額またはアカウントに関する質問はこちらからお問い合わせください。 ※Amazon.com または Kindle のサポートにお問い合わせはこちらからお問い合わせください。</p> <p>アスタリスク (*) は必須情報となります。</p> <p>姓* <input type="text"/></p> <p>名* <input type="text"/></p>
---	---

※「AWS お問い合わせ」で検索して下さい。

AWS Well Architected 個別技術相談会お知らせ

- Well Architectedフレームワークに基づく数十個の質問項目を元に、お客様がAWS上で構築するシステムに潜むリスクやその回避方法をお伝えする個別相談会です。

<https://pages.awscloud.com/well-architected-consulting-jp.html>

- 参加無料
- 毎週火曜・木曜開催

The screenshot shows the registration page for the AWS Well-Architected Framework consultation. At the top, the AWS logo is displayed. Below it, the title reads "[毎週火、木曜開催] AWS Well-Architected 個別技術相談会". The main heading is "AWS 上で構築するシステムのリスクの把握・回避方法をご希望のお客様". A sub-heading states: "この度 AWS をご活用頂いているお客様を対象に「AWS Well-Architected 個別技術相談会」を開催致します。". The main text explains the consultation's focus on risk management and avoidance, covering five key areas: Security, Reliability, Performance, Cost Optimization, and Operability. A list of icons represents these areas: a shield for Security, a lightning bolt for Reliability, a fan for Performance, a dollar sign for Cost Optimization, and a document for Operability. Below the text, there is a link to a PDF document: "説明資料(PDF) [AWS Well-Architected Framework -クラウド設計・運用ベストプラクティスの活用-]". A paragraph describes the registration process, including a pre-consultation meeting and a Q&A session. At the bottom, there is a registration form with fields for "姓:" (Last Name), "名:" (First Name), and "Eメールアドレス:" (Email Address).